



本殿改築の棟札と古文書

今もこの地に力強く脈打っている

大工棟梁と彫物師

大工棟梁は、溝口村の池上善八（本姓高見）で武蔵国妻沼村（埼玉県妻沼町）の宮大工林兵庫正清のもとで腕を磨き、故郷の宮之久保に帰ってこの本殿を建てたものである。

彫物師は、東上州花輪在上田沢村（現群馬県勢田郡黒保根村）の関口文治郎有信とその弟子5人である。文治郎は、上州の左甚五郎とも言われた名匠であった。

善八は、林兵庫の門弟として長年修業した腕をこの熱田神社で発揮する良い機会に出会った。幸い、上州当時知り合いとなり、親しくしていた名匠関口文治郎を招いて彫刻の担当を依頼した。

熱田神社は、名匠二人が建築と彫刻を見事に調和させた傑作である。

重要文化財指定と保護

熱田神社本殿が建築され、溝口の人たちはこのお宮を大切に保護してきたようすが伺える。記録をたどっていくと現在の覆屋は明治21年(1888)に再建されているので、それ以前にも雨覆の措置がとられていたものと思われる。

長谷村文化財指定……………昭和47年8月25日
 長野県宝指定……………平成元年8月14日
 国重要文化財指定……………平成5年12月9日
 今から250余年前、溝口の人たちが浄財のみでこのお宮を造ろうとした気概、信仰の深さに胸を打たれる思いがする。また、優れた職人芸術に接し、先人の残してくれた偉大な宝物を後世に伝えていく義務を痛感する。

余話

歓喜院聖天堂（重要文化財）は埼玉県妻沼町にあり、棟梁は林兵庫正清である。この建築は日本で最も過剰的な建築として有名である。熱田神社本殿の彫刻師棟梁であった関口文治郎は、この聖天堂の彫刻も担当している。熱田神社はそのような様式を信州に伝えたと共に、県内の江戸時代の建築の中では最も過剰的な作であるといわれている。

本殿建築のため、境内にあったケヤキの大きさを1本切ってすべてができたといわれている。このケヤキを伐ったとき空洞となっていた根元から、大蛇の白骨がでてきた。村人は益々熱田神社の神霊を信じて、本殿北側の切株跡へ小さな社を建てた。これが高籠神を祀った籠神社であるという。この地ではこの社を蛇骨様とも呼んでいる。

熱田神社所在地

長野県伊那市長谷溝口宮の久保

